

あとがき

— Afterword —

「富山大学キャンパスマスタープラン2025」をお届けできることを、心より嬉しく思います。策定にあたり、検討を主導いただいたワーキンググループの皆様、学内外の多くの関係者の皆様の知見とご尽力に、深く感謝申し上げます。

本学は平成17（2005）年の再編・統合以降、2007年の初版「キャンパスマスタープラン」から2011、2015、2020へと継続的に見直しを重ね、教育・研究・社会連携の現場で得た経験と教訓を蓄積してきました。各計画には、キャンパスづくりに携わった教職員と、そこで学び働いた多くの方々の思いが刻まれています。一方で、耐震化や老朽施設の改修を進めつつも、なお解決すべき課題が残されていることも事実です。

いま社会は、デジタル技術の急速な進展、脱炭素への転換、人口減少・少子高齢化、自然災害や感染症の教訓など、かつてない速度で変化しています。

大学には、専門の枠を越える知の融合と、産学官金や地域との連携を通じて価値を創出し、社会課題の解決に資する役割が求められています。その基盤となるキャンパスには、安全・安心と快適性に加え、多様な人々が集い、対話し、挑戦と共創が生まれる場としての機能が不可欠です。国が掲げる「イノベーション・commons（共創拠点）」の考え方も、この方向性を後押しするものと言えるでしょう。

本計画では、学修・研究、生活、社会連携を支えるキャンパス環境を総合的に捉え、地域とともに歩む大学拠点の在り方を示しています。そしてその考え方は、施設を大学の将来を支える重要な経営資源として捉え、柔軟かつ一体的に活用していくための共通の指針となるものです。

整備者と使用者の認識のずれを丁寧にすり合わせ、「使いやすさ」「効率性」に加えて

「居心地」「誇り」「愛着」といった感性的価値を高めていくことを重視します。

大学の施設は、次世代へ受け継ぐべき公共的インフラであり、学部・教員の占有物ではなく、大学全体の共有財産です。本学の整備は、国民の皆様の貴重な税財源、寄附、そして自己財源に支えられてきました。ここに篤く感謝申し上げるとともに、限られた資源を最大限に活かし、計画的かつ段階的に更新・再編を進めてまいります。

本マスタープランは、策定時点で完結するものではありません。実践を通じて検証し、改善し続ける**「生きた計画」**です。今後、個別事業の具体化と運用の過程で、学生・教職員・卒業生、地域社会、産業界、行政、国内外の研究者を含む多様な関係者の参画と対話を重ね、富山の地が持つ豊かな自然とコンパクトな都市機能という特性を生かしながら、創造性と包摂性に富むキャンパスへと磨き上げていきます。

本計画が、本学の未来を支える確かな羅針盤となり、学生・教職員一人ひとりにとって誇りと愛着を育む場の創出につながることを願い、あとがきといたします。

令和8年3月

理事・事務局長（施設担当）
施設マネジメント委員会委員長

鈴木 規子



「キャンパスマスタープラン2025」の改訂経緯（第1版）

2025年（令和7年） 5月21日	第1回施設マネジメント委員会において、キャンパスマスタープラン2025検討ワーキンググループの設置について審議，了承
2025年（令和7年） 9月18日	第1回キャンパスマスタープラン2025検討WGにおいて検討方針及びスケジュールを検討
2025年（令和7年） 10月29日	第2回キャンパスマスタープラン2025検討WGにおいて見直し案を検討
2025年（令和7年） 12月18日	第3回キャンパスマスタープラン2025検討WGにおいて見直し案を検討
2026年（令和8年） 2月9日	第5回施設マネジメント委員会で審議，案を了承
2026年（令和8年） 3月10日	役員会で審議し，決定
2026年（令和8年） 3月10日	経営協議会に報告
2026年（令和8年） 3月19日	教育研究評議会に報告
2026年（令和8年） 3月30日	公表

企画・編集

施設マネジメント委員会 委員長 理事・事務局長（施設担当）鈴木 規子

キャンパスマスタープラン検討ワーキンググループ

グループ長 都市デザイン学部教授	安永 数明
経済学部教授	唐渡 広志
医学部教授	一條 裕之
芸術文化学部教授	河原 雅典
財務施設部長	吉居 真吾
財務企画課長	西川 幹郎
施設企画課長	西村 健司
学生支援課長	谷村 英一
研究振興課長	熊澤 周平
富山県土木部都市計画課長	澤 徹
株式会社HARITA代表取締役社長	張田 真

富山大学キャンパスマスタープラン2025

2026年3月初版第1版発行
国立大学法人 富山大学

〒930-8555 富山市五福3190

TEL：076-445-6011（代表）